

JANES

ニュースレター

No. 31-1
Oct. 2023

日本ナイル・エチオピア学会

- 第32回日本ナイル・エチオピア学会学術大会最優秀発表受賞者エッセイ
- 現地情報
- 学会動向
- 会員の異動



第32回日本ナイル・エチオピア学会 学術大会最優秀発表受賞者エッセイ

発表タイトル:

「エチオピア西南部アリ地域における気鳴楽器と演奏集団」

Ayaka Tanaka

田中綾華（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

エチオピア西南部高地に暮らすアリの人々は、タケ製のたて笛（気鳴楽器）オイサ（woysa）を集団で演奏する。この発表では、オイサの特性と演奏集団や活動の特徴をあきらかにし、今後の調査計画について報告した。発表者はエチオピア西南部高地にあるP村に2022年10月から45日間滞在し、演奏集団Zのメンバー28名のうち奏者5名とリーダー1名を対象に予備的な調査をおこなった。彼らの多くは、P村にて定住的な農耕活動をおこないながら演奏活動に従事している。

オイサは、アリ語でタケ製の指孔がない閉管の気鳴楽器の総称である（写真1）。1本の管からはひとつの音が発せられる。P村では6管を1組としていたが、J市など他地域では7～8管を1組としていた。4組のオイサの6管の長さを計測したところ、ティティ(tit)が最も短く、バアビ(baabi)が最も長かった。4組のうち1組を対象に、各管の周波数を計測したところ、ティティ(tit)は475.09Hz、バアビ(baabi)は365.18Hzであった。P村周辺ではタケの品種13種類が認識されており、オイサ製作にはマーカ(maaka)という品種が用いられていた。オイサを新たに製作する場合、1本のタケから6本の管を製作し、2名の奏者で音を調整する。管を補填する場合、隣り合う音高の管を参照してひとり以上の奏者が音を調整する。P村の場合、演奏は6人1組で行われる。奏者ひとりが1本の管を吹いて、複数の管を同時に演奏する。演奏中やその前後に、奏者同士で管を交換することがあり、しばしば奏者の

交代が起こる。集団Zでは4番目に長いマーアイ(maai)と呼ばれる管の奏者が、演奏をリードし楽曲の演奏順を決めていた。この役割も交代が発生し、毎回特定の奏者だけが担うとは限らない。

P村のオイサ演奏集団Zは、南オモ県からの依頼で2021年に設立された。成員は男性奏者が20名、女性ダンサーが8名で、確認できた楽曲8曲のうち7曲を、祝祭日、葬送儀礼にて演奏していた。集団Zが調査期間中に活動した10回のうち5回は行政の依頼で、アリの音楽文化の広報に関わる演奏であった。行政の依頼で、P村や周辺の市にてデシタゲナ(dishtagina)と呼ばれる農作業の終了を祝う祭りの演奏も3回おこなった（写真2）。伝統的首長の姉が亡くなった葬送儀礼の際には、近隣の村に招聘され演奏をおこなった。これらの活動に対して、食事や酒が謝礼として振舞われていた。活動の間に、集団Zは練習を1回おこなった。



図1 アリ地域にて使用されているタケ製気鳴楽器オイサ
(2022年10月31日 発表者撮影)

VS LETTER

オイサ演奏は、アリの代表的な音楽文化として注目され、その演奏の機会の提供や組織化に関して行政の関与がみられる。集団Zのリーダーは携帯電話を使って演奏を録画し、Facebookなどを使って発信を始めてい

る。今後は、行政による介入や奏者自身によるオイサ演奏の発信、それらによる彼らの演奏や活動への影響をふまえながら、演奏技術の習得や継承について調査研究を進めたい。



図2 dishta gina にてオイサを演奏する様子 (2022年12月2日 発表者撮影)

現地情報

「2022年のハルツーム滞在と、2023年の内戦について」

Kensuke Kanamori

金森謙輔 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

現在のスーダンの内戦と、その直前の状況:

2023年4月15日、スーダン国軍と準軍事組織のRapid Support Force (RSF)が、首都ハルツームをはじめ各地で軍事衝突を起こし内戦状態になった。この内戦は、2023年8月現在も続いている。私は、この騒乱がはじまる直前の3月までハルツームに約半年間滞在して、これまで調査してきたローカル

NGOの成員のその後について追跡調査をしていた。2019年の市民革命とコロナ禍をはさみ、3年半ぶりのフィールドワークであった。

スーダンでは、2019年に市民革命が起き、軍事政権から民政移管への準備がすすめられてきたが、2021年10月のクーデターで再び軍事政権に戻っていた。このクーデター以降、国軍とRSFは協力しながら政権を掌握し、民政を求

める市民勢力を弾圧してきた。国軍とRSFが、2022年12月以降に緊張状態を高めていることは噂されていたが、世間では深刻にとらえられていなかったようである。衝突の二日前、私は複数の友人たちにこの状況をメッセンジャーアプリで尋ねたのだが、「いつものことだから大丈夫」「戦争なんてやったら政権の維持ができなくなるよ」「ラマダン中に戦争はしないよ」と楽観的であった。協力関係にあった彼らが、なぜ内戦にいたるほどの衝突をしたのかはいまだに明らかになっていないが、民政移管をせまる国際社会からの圧力と、市民勢力との交渉による板挟みの中で、軍とRSFのどちらが主導権や利権を維持していくのかという問題が、緊張を高める原因になったのではないかという報道もされている。

調査地にしていたハルツームとバハリについて：

スーダンで「ハルツーム」と言う時、文脈によって二つの意味を使い分ける。ひとつめは、白ナイルと青ナイルに挟まれた中洲に位置する首都ハルツームを指す場合。もうひとつは、首都に加え、白ナイルを隔てたハルツーム北西部に位置する旧市街のオンドルマン、青ナイルを隔てたハルツーム北部に位置する第三の都市であるバハリ、これら三つの都市が成す首都圏を指してハルツームと言う場合である。この首都圏には、600万人から800万人が居住していると言われ、首都ハルツームを中心に「ハルツーム」の拡大が急速に進行している。スーダンの人口が約4500万人とされていることから、少なく見積もっても6人にひとりくらいはハルツーム近郊で生活をしている計算になる。

私は、先述した青ナイルを隔てた都市であるバハリ西部の友人宅に居候をしていた。やや裕福な人たちが住むナイル川沿いの閑静な住宅街にあり、普段聞こえてくる大きな音は、サッカーをする子供たちの声や、野菜や果物の訪問販売をしにくる人の呼び声くらいだった(写真1)。その一方、居候先から1kmほど離



写真 1. 筆者が居候していた家の近隣



写真 2. バハリ中心街の市場

れたバハリ中心街(写真2)では、市民による政府への抗議活動が週に1、2回おこなわれていた。抗議活動があった日には、鎮圧部隊が使用した催涙ガスが住宅地付近の大通りまでたどられ、居候先からでも銃声が聞こえてくることがあった。ガスは何時間もその場に留まり、ガスの近くを通り過ぎる際には、市民たちはカバンからマスクを取り出し着用していた。マスクをしていない人は、ハンカチやポケットティッシュを鼻と口に当てて往来をしていた。抗議活動の日程や場所は、SNSやホームページ上で告知される(写真3)。抗議の時間外にバハリの中心街に行けば、時々催涙ガスが留まっていること以外、いつも通りの街であった。

抗議の現場に遭遇する：

ある日、私は聞き取り調査をするため、首都ハルツームへ行こうとしていた。ハルツームに行くには、バスに乗って青ナイルにかかる橋を渡る必要がある。居候先から、バハリ中心街へバスで向かっていたところ大規模な抗議活動に鉢合わせてしまった。告知の確認が甘かった。ハルツームへ向かうバス停付近には、机や露店の叩き台でバリケードが築かれ、タイヤが燃やされていた。バリケードの中では、アーマーを着た鎮圧部隊が催涙弾を飛ばし、催涙弾は放物線を描きながら白いガスをまき散らしていた。抗議者たちは、ゴーグルを着用したり布を顔に巻いたりしながら、鎮圧部隊に対峙していた。私を含むバスの乗客たちは、バリケードから50mほど離れたところで降ろされ、私は路上でバリケードの先を見ていた。ガスの影響で、目を開けているのも呼吸をしているのも苦しく、見ているのがだんだんと恐ろしくなり、歩いて家に引き返そうとした時、バリケードの方から「おい、危ないからこっちにくるな」と叫びながら3人の若者がこちらにやって来た。彼らは、「今日は橋が閉鎖されてどこにもいけないし、撃たれるかもしれない



写真 3. SNS で告知された抗議活動の日程

から帰ったほうがいい」と言い、私の手を引いてガスをほとんど感じなくなる場所まで送ってくれた。彼らは、はげますように私の肩をポンポンと叩いたのち、バリケードの中に走って戻っていった。彼らを見送っていた私と目があった露店商は、何も言わずにうなずいた。築かれたバリケードの外側には、臨時の露店とバス停が立ち並び、野菜や果物が売られ、臨時のバス停には人だかりができていた。ストリートチルドレンが「ボンバン(催涙ガス)、ボンバン」と言いながらマスクを売っていた。居候先に戻ると、家の前の通りでは、いつも通り子供達がサッカーをしていた。

バハリの壁画とメッセージ:

バハリ中心街の大通りには、2019年の革命に関する壁画や、軍事政権の風刺画などが描かれている。住宅街の中に入っても、壁には多くのメッセージが残されているのを見ることができる。居候先を中心に、半径500mほどを歩き回ったところ、確認できたものだけでも100か所以上で壁画やメッセージを見つけることができた。これらは大きく分けて三種類に分類することができるようだ。ひとつめは、犠牲者を弔



写真 4. カフェテリアの壁に描かれた犠牲者たち

たり、軍事政権を風刺する壁画(写真4,5)、ふたつめは、2019年の革命や2021年のクーデターが起きた日付を書き記したもの(写真6)、三つめは、抗議運動の集合場所や時刻の告知をするためのメッセージや、抵抗組織の檄文(写真7,8)である。インターネットや電話などの通信手段が断たれた際にも、集合したり情報共有したりできるように、掲示板としての役割を果たしているようだ。これらの写真を撮って位置の記録をしている中、壁を所有する住人や店主に話を聞くことができた。所有者たちは、「軍や警察に脅されて何度か消したけど、すぐ上書きされてしまうんだ」「忘れてはいけないことだから消さない」「書いていた人に食事を提供したことがある」などと語り、どの所有者も、勝手に書かれることへの反発や不快感を感じたりはしていないようだった。現在、私が居候していた家や周辺の壁画は、軍とRSFの市街戦の現場になり、粉々になってしまったと居候先の友人から聞いた。

フィールドの人びとの現在と今後:

私がこれまで調査対象としてきたローカルNGO職員の一部は、2019年の革命以降、英米などの政府機関を支持母体に持つ民主化を目指す国際NGOや、政策提言をするシンクタンクへ転職していた。彼らは、地域ごとで活動する抵抗組織の情報共有の窓口になったり、市民の政治リテラシーを高めることを目的とした、政策や選挙に関する講演や座談会を開催したりするなどして抵抗組織の支援をしていた。また、援助機関に頼らずに、貧困層や女性の自立支援することを目指し、社会起業家としてビジネスを始めているものもいた。言論やビジネスで軍政に抵抗してきた彼らは、内戦勃発直後には、避難民や傷病者の誘導や炊き出しなどにあたっていたと聞いた。現在、彼らはエジプトやエチオピアやケニアに事務所を移して仕事を続けているが、スーダンに残り避難民の支援を続けているものもいる。彼らは口をそろ



写真 5. バシル前大統領とコロナを風刺した壁画

えて、まだ革命は終わっていないという。街が灰になっても、スーダンの民政をあきらめず、革命を国内外から続ける人びとがいる。現在のスーダンの惨状を思うと、今後どのようにスーダン社会を変革していけるのか想像がつかない。しかし、彼らと関わっていると、私は不思議と悲観的にならないのだ。



写真 6. 4月6日と書かれている



写真 7. 抗議活動への参加を求める檄文



写真 8. 抗議活動の日付の告知

学会動向

■2023年度総会

2023年4月16日(日)に、大阪公立大学を会場とするハイブリッド形式で、日本ナイル・エチオピア学会2023年度総会が開催されました。議題は以下のとおりです。

議事

- ・2022年度事業報告
- ・2022年度会計報告及び会計監査報告
- ・2023年度事業計画(案)について
- ・2023年度予算(案)について

お知らせ

- ・2024年度以降の学術大会の開催について
- ・第29回日本ナイル・エチオピア学会高島賞について
- ・NES投稿規定の改訂案について
- ・収支状況とその改善について
- ・エチオピアのビザ申請について

2022年度事業報告

1. 公開シンポジウム「エチオピアの連邦制再考：民族といかに向き合うのか」 2022年4月16日(土)、オンライン開催(開催機関：アジア経済研究所)
2. 第31回学術大会
2022年4月17日(日)、オンライン開催(開催機関：アジア経済研究所)
3. 第28回高島賞の授与
清水信宏 対象活動「エチオピア・メケレ地域における研究活動」 主な論文 Shimizu N, Asfha AT. Historical orientation of Yohannes IV Palace in Mekelle, Tigray State, Ethiopia, from the aspects of planning and building techniques. *Japan Architectural Review*.

村橋勲 対象作品『南スーダンの独立・内戦・難民—希望と絶望のあいだ』(昭和堂、2021年)

4. 第31回学術大会最優秀発表賞の授与
石川博樹「16～19世紀エチオピア北部における副食」

Rumi Okazaki, Tadesse Girmay, Alula Tesfay, Ikuro Shimizu, Keita Aoshima, Nobuhiro Shimizu, Melsew Tefera, Amsalu Woldie Yalew 'Mapping Urban Heritages: The Case of Sekota, Ethiopia.'

相原進「エチオピア国立劇場のダンサーたちの技術習得とキャリア・ディベロップメント」

5. 学会誌の発行・編集

Nilo-Ethiopian Studies No.27の編集・J-Stageへの登載・オンデマンド印刷と発送(名誉会員とアフリカ・アジアの図書館)

6. ニュースレターの発行・編集

JANESニュースレターNo.29-2, No.30-1, No.30-2の編集・公開

7. 会費請求

2022年6月に請求書を送付した

2023年度事業計画案

1. 公開シンポジウム「女性兵士が問いかける地平—エチオピア、ルワンダ、ソ連、ウクライナの事例から」 2023年4月15日(土)、ハイブリッド開催(開催校:大阪公立大学)

2. 第32回学術大会 2023年4月16日(日)、ハイブリッド開催(開催校:大阪公立大学)

3. 第29回高島賞の授与

4. 第32回学術大会最優秀発表賞の投票

5. 学会誌の編集・刊行

Nilo-Ethiopian Studies No.28の編集・J-Stageへの登載・オンデマンド印刷と発送(名誉会員とアフリカ・アジアの図書館)

6. ニュースレターの発行・編集

JANESニュースレターNo. 31-1, 31-2の編集・公開

7. 会費請求

2023年6月に請求書を送付する

■第32回学術大会

2023年4月16～17日に、大阪公立大学の共催のもと、第31回学術大会がハイブリッド形式で開催されました。最優秀発表賞には、田中綾華さん(京都大学)が選出されました。公開シンポジウム及び研究発表の演題と発表者は以下のとおりです(敬称略)。

【公開シンポジウム】 (共催:大阪公立大学女性学研究センター)

「女性兵士が問いかける地平—エチオピア、ルワ

ンダ、ソ連、ウクライナの事例から」

内藤葉子(大阪公立大学)「趣旨説明」

橋本信子(大阪経済大学)「女性が兵士になるとき—ソ連、ウクライナの事例」

眞城百華(上智大学)「エチオピア・ティグライにおける女性兵士の経験—戦時下の女性解放と戦後への架橋」

近藤有希子(京都大学)「彼女たちの戦線—ルワンダ丘陵をめぐる危機的日常と女性兵士という選択」

秋林こずえ(同志社大学)「コメント」

【研究発表】

島津侑希「エチオピアにおける産業人材の非認知的能力の育成—アディスアベバ市内の縫製工場従業員を事例として—」

田中利和、カッバラレゲサ「Ethio-Tabiの創造に関する実践的地域研究⑦-縫い付け地下足袋の研究と事業構想」

石川博樹「『メネン皇后学校料理書』とエチオピア北部における副食の歴史的变化」

田中綾華「エチオピア西南部アリ地域における気鳴楽器と演奏集団」

川瀬慈「映画上映『吟遊詩人-声の饗宴-』」

Rumi Okazaki, Ikuro Shimizu, Tadesse Girmay, Fasil Giorghis, Eisuke Shoji, Kentaro Nishiyama, Kei Misumi, Taiga Takehara, "Tracing the Original Urbanscape of Addis Ababa: Case of Armenian Sefer"

石原美奈子 「エチオピア都市における宗教空間の力学に関する—考察—ジンマ市の事例から—」

会員の異動

2022年度入会者(2022年12月26日以降)

田中綾華(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・学生会員)

2023年度入会者

中村結友(南山大学人間文化研究科・学生会員)

立花静香(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科・学生会員)

※上記期間での退会者なし

編集後記

会員の皆様に有益な情報を発信してまいります。今後とも、ニュースレターへのご協力をお願い申し上げます。(松波康男)



JANESニュースレター No. 31-1

2023年10月12日配信

編集・配信：日本ナイルエチオピア学会

編集委員：松波康男、相原進、清水信宏

表紙写真：金曜モスクに集まるこどもたち（ベニシャングル・ Gumz州）
撮影：松波康男（2019年12月）